

國學院大學學術情報リポジトリ

〔談話室〕 論理と信仰：シドッチからインド仏教

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡辺, 俊和, Watanabe, Toshikazu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000488

論理と信仰…シドッチからインド仏教 渡辺俊和

問部は、その男が薩摩・屋久島についたとき、紙に大まかな地図のようなものを記して島の人々に見せ、いちいち紙を指さしてローマ、ナンバン、ロクソン、カステイラ、クリシタンなどと言ひ、ローマと言ったときに地図と自分を指さしたという話をした。(中略) 問部の話は白石の胸にはげしい好奇心を巻き起こしていた。たかがその程度の語学力で、男は何を伝えに来たというのだろうかと思つたのである。クリシタンの信仰を伝えに来たという答はわかつてゐるが、それしか言葉を話せない男が、それが可能だと思つてゐるらしいことが訝しくてならなかつた。(藤沢周平『市塵』上、講談社文庫、pp.165-166.)

昨年(二〇一八年)十月、客人とともに立ち寄つた國學院大學博物館では共同特別展「クリシタン―日本とキリスト教の469年」が開催されていた。そこで筆者は「その男」シドッチ (Giovanni Battista Sidotti, 一六六八―一七二四年) と一ただし頭蓋骨の複製の―対面した。

シドッチが到着した当時、日本は鎖国の真つ只中であつた。上陸後彼は捕縛されて江戸に送られ、布教活動を許されることなく正徳四年(一七一四年)、小日向の切支丹屋敷の地下牢で死んだ。彼への尋問をもとに新井白石(一六五七―一七二五年)が『西洋紀聞』を著し、同著の最後でキリスト教批判を行っていることはよく知られている。

展示会を訪れた当時筆者は、ちょうど演習でインドにおける主宰神(全知全能の創造神)の存在論証を扱つていたこともあり、白石によるキリスト教、特に神の存在への批判について調べてみた。その結果、「創造神自身の創造は何に

よるのか」「完全無欠の神が創造を行う動機は何か」などの共通する問題意識が白石とインドのテキストとで見られた。さらにまた、先行研究によれば、白石のキリスト教批判は中国明代末期の仏教僧である智旭（一五九九—一六五五年）が儒家の立場をとって著したキリスト教批判書『天學初徴』および『天學再徴』や、先行する日本の儒学者などによる著作を参照して行われていることであった。

インドにおいて主宰神に対する批判を理論的に整備したのは仏教徒であった。ナーガールジュナ（龍樹…二世紀）に帰せられる『十二門論』（漢訳でのみ現存）や、唯識派の基本テキストの *Yogācārahūmi*（『瑜伽師地論』）をはじめとする多くの論書で主宰神の存在を否定するための論証が行われている。これらインド仏教での主宰神批判は、玄奘（六〇二—六六四年）などにより漢訳されて中国に伝わり、さらに儒教などの他宗教との交渉をつうじて、広く東アジアに浸透していった。

このような状況を考慮すると、白石および彼が依拠した儒学者らによるキリスト教および神に対する批判は、おそらく彼らが意識することなしに、インド仏教徒によって整理された主宰神批判からの影響を受けたものであったと考えられる。

ところで白石は、シドッチによる自然科学についての説明を理知的であると評する一方で、キリスト教についての彼の説明を、まるで別人物によるかのような稚拙なものであったと記している。しかしこの別人物の側にこそ、坂口安吾の言う「イノチガケ」のシドッチがいたのであり、彼は信仰にこそ命を賭したのである。

また、白石による批判の元となっている仏教説においては、主宰神批判のように論理的に他学派の説を批判することの動機は「破邪顕正」であった。つまり、論理を用いるのは自らの立場である仏教説を正しいものと判断した上でのことである。そしてそのような判断は、たとえそれに至る過程が論理に依拠していようと、最終的には信仰による。

しかし信仰とは一体何なのか。そして論理と信仰とは同一人物の中でどのように折り合いをつけられるのか。シドッチとの対面がもたらしたこのような問いについて自分なりの答えを出すことが当面の課題となりそうである。

（インド哲学・仏教学）